

ポローニア

paulownia



鉄道ジオラマ:筑波大附属駒場中学校 鉄道研究会製作

目次

教育長挨拶

巻頭言「ダイバーシティ共生社会を担う人材の育成」◆石隈利紀…2

「共生社会を目指す講演とシンポジウム」が開催されました
～山海嘉之教授の講演と附属校生徒4名によるシンポジウム～

◆今井二郎……………2

第10回 国際ピエール・ド・クーベルタン・

ユースフォーラム派遣報告 ◆中塚義実……………4

つくばグローバルサイエンスウィークへの参加 ◆甲斐雄一郎…4

私の目標 ～5年後を目指して～ ◆梶原悠未……………5

パラリンピックをめざして

～IPC Grand Prix Final 2015出場～ ◆小山信博・吉川琴美……………5

埼玉県の未来を担うアスリートが集結

◆宮内綾香・八尾陽夏……………5

パラリンピックを目指して仲間と共に ◆安室早姫……………5

「音楽はバリアフリー」～東京藝術大学「障がいと
アーツ」に高等部生徒が出演～ ◆永杉理恵……………6

「餅つき親子交流会」を行いました ◆工藤久美……………6

工房わかざりとの連携プロジェクト ◆青柳泰生……………6

ウガンダ国の「中等理数科強化教員研修
プロジェクトフェーズ3」に関わって ◆盛山隆雄……………7

視覚障害学生の鍼臨床能力向上のための研究
◆宮本俊和……………7

朝永振一郎記念第10回「科学の芽」賞
表彰式・発表会開催 ◆松本末男……………8





TOSHINORI
ISHIKUMA

ダイバーシティ共生社会を担う人材の育成

筑波大学理事・副学長、附属学校教育局 教育長 石隈利紀

教育は未来志向です。今と未来で確かなことは、多様な人間が限られた地球の資源を共有して共に生きていくことです。したがって「多様性を分かり合う、活かしかう」の教育を小・中・高そして大学と一貫して行うことが、子どもの未来の準備になります。筑波大学附属学校群（11校）は来年度から6年間の第3期中期目標・中期計画の案を作成しました。筑波大学の人材育成のミッションの柱は、「グローバル人材の育成」であり、附属学校群のミッションはインクルーシブ教育システムとグローバル教育カリキュラムの開発の構築です。そしてインクルーシブ教育とグローバル教育は人材育成の車の両輪であり、それをつなぐ車軸がダイバーシティ共生です。

ダイバーシティ（多様性）における違いには、性別・年齢・人種・国籍など見える違いや、文化、宗教、育った環境、経験、あるいは価値観など見えない違いがあります。障害など精神的・身体的特徴も違いのひとつです。多様性は問題（葛藤）が生まれる土壌にもなりますが、豊かな発展の力にもなります。そこでインクルーシブ教育を通して、障害のある子どもも障害のない子どもも、苦戦している子どもも、共に生活し、学ぶことで、多様性と向き合う練習になります。そしてグローバル教育を通して、自分とは異なる文化をもつ人と生活する機会を得ることで、多様な文化に驚き、とまどい、対処する経験を得ることができます。黒姫高原共同生活では、9歳から18歳の年齢の子どもが、育った環境の違いや精神的・身体的特徴の違いと向き合う経験をしました。これは障害のある子どもと障害のない子どものともに学ぶインクルーシブ教育であり、多様な「文化」をもつ子どもたちの異文化体験を促進するグローバル教育でもありました。

「グローバル教育」と「インクルーシブ教育」の両輪を「ダイバーシティ共生」という車軸でしっかりつないで、多様な人々や文化の交流のなか一人ひとりが尊重される社会を担う人材を育てていきたいと思っています。

「共生社会を目指す 講演とシンポジウム」が 開催されました



～山海嘉之教授の講演と附属校
生徒4名によるシンポジウム～

附属学校教育局
教育長特命補佐
今井二郎



12月12日に「共生社会を目指す講演とシンポジウム」が、筑波大学東京キャンパス文京校舎を会場に、本学附属学校の児童生徒と関係者約150名が参加して開催されました。

本講演及びシンポジウムは、平成27年度文部科学省委託事業「インクルーシブ教育システム構築モデル事業（スクールクラスター）」の一環として開催されました。

前半は、ロボットスーツHALの開発者として世界的に著名な山海嘉之教授（筑波大学大学院システム情報工学研究科）より「これからの共生社会を生きる筑波附属の子どもたちに伝えたいこと」をテーマとした講演を行っていただきました。ご自身が少年時代に読んだアイザック・アシモフの「I.Robot」から感銘を受け、将来社会に役立つロボットを作る科学者になりたいと思ったこと、「夢を持つこと、そして持ち続けること。多少の寄り道はあっても持ち続けることが大切。そしてそのためには基礎的な知識、



学力を身につけて欲しい」との生徒へのメッセージもいただきました。また様々な人、様々な分野の研究者とも協力し合うことが新しいテクノロジーを拓き、お互いの力を出し合う共生社会につながる大きな力を生み出すことが、世界でも画期的な医療用、福祉用ロボットスーツHALの研究と実現へとつながったことなど、また附属校生徒への期待を含めた示唆に富むお話に、児童生徒は目を輝かせて聞き入りました。生徒との質疑応答ではHALの原理や平和利用、身近な人への適用や今後の展望などについて多くの質問が寄せられ、山海先生はどの質問にも一つ一つ丁寧に答えてくださいました。

後半は「いろいろな人とともに生きるということ」をテーマに、コーディネーターである石隈利紀附属学校教育局教育長の進行で、附属学校生徒4名によるシンポジウムを開催しました。

冒頭、今夏に実施された黒姫高原共同生活の様子がスライドで紹介され、参加できなかった生徒もこの活動の趣旨を共有しました。

黒姫高原共同生活に参加した附属中学校の浅井さんと附属聴覚特別支援学校高等部の柳谷さんは、それぞれ「インクルージョンには、共生社会は障害のあるなしを超えての楽しい活動がヒントになる」、「この活動に参加して、様々な人と助け合ったり、通じ合ったりした経験が共生社会につながる」との意見が発表されました。SGHプログラム「国際フィールドワーク」でインドネシアで調査にあたった附属坂戸高校の濱崎さんは、「自分が直接体験したことで、イスラム教や異文化についても考えることができた。宗教も含めて異文化は知ること、知ろうとすることでコミュニケーションにつながる」と、通常の小中学校から附属視覚特別支援学校に入学した高橋君は、「特別支援学校に入学してはじめて、障害とは何だろうと考えた。それは個性だと考えることによって、お互いが作ってい

る壁を乗り越えられるのではないだろうか」との発表がありました。

いずれも、「共に生きる」ことについて、具体的体験に基づいたしっかりしたメッセージのある発表でした。

発表に続いて、会場の生徒から様々な意見や感想が述べられました。中には友人との交流体験や世界で起こっているテロ問題で考えたことから、共に生きることの大切さを訴える意見が印象的でした。石隈教育長からは、「筑波には11の附属学校があり、いろいろな年齢やいろいろな人がいるので、今後もこのような交流で学びあえることを願っています」とのまとめがありました。

今年は、夏の黒姫高原共同生活で共に体を動かして体験したことを、この共同シンポジウムを通して共有して「共生」を体験し考えることができました。今後、心の繋がりや共生を語り合える附属学校間での活動が、様々な形で広がっていくことを願っています。



第10回 国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム 派遣報告

CORE運営委員／附属高等学校
中塚義実



2年に一度の標記フォーラムが、2015年8月29日(土)～9月5日(日)、スロバキアの温泉保養地ピエスタニで開かれた。世界中から高校生が集まり、近代オリンピックの創始者クーベルタンの思想を、スポーツや芸術活動、ディスカッションなどを通して学ぶ場である。過去2回は筑波大学附属高校から2名のみの参加であったが、今回は日本から7名を派遣。3月に筑波大で開かれた「クーベルタン・嘉納ユースフォーラム2015」で選考された日本代表の内訳は、筑波大学附属高校から3名、自由学園男子部・女子部、帝京高校、中京大中京高校から各1名である。

数回の事前研修を経て8月27日に日本を立ち、まずはウィーンへ。2泊の研修ののち29日にバスで人口3,000人のピエスタニへ。当地にあるクーベルタン・スクールが今回のホスト校である。

スポーツテスト、筆記テスト、グループ討議、アートパフォーマンス、そして事前に実施してきたボランティア活動がクーベルタン賞をめぐるコンテストの内容である。各国の文化を紹介するミニエキスポや、毎夜開かれたダンスパーティ、ピエスタニ市街へのパレードや市民向けのパフォーマンスなど、異文化を肌で感じながら自分たちの文化を再認識する。約1週間の共同生活を通して若者らしいつながりを築き上げた参加者は、オリンピックやパラリンピックの本当の意義を全身で感じたことだろう。

筑波大附属高校2年生の高橋優衣さんは、「エストニアとか南アフリカとかジンバブエとか、自分が絶対旅行で行かないような国の人に出会って、こんなに素晴らしい体験ができて、普通に生きてたらできないなと思った。いろんな国の友だちといっぱい交流して、初めての経験をたくさんして、いままでの自分の価値観がいい意味でぶち壊されて一皮むけた気がした。将来への考え方も変わったし、少し大げさかもしれないが、このフォーラムで人生が変わった」と語る。

今後活かしてもらいたい。

4校7名で編成された「日本代表」。ピエスタニを象徴する像は、温泉治療のおかげで杖がいなくなったことを表現している。



アイマスクをして球技を楽しむ様子。手軽に障がい者スポーツを体験するプログラムである。

つくばグローバルサイエンスウィークへの参加

附属学校教育局 次長 甲斐雄一郎



筑波大学ではさまざまな学術分野の最新の成果を共有し、より良い未来を実現するための方策を議論する場としてつくばグローバルサイエンスウィーク(TGSW)を位置づけています。2015年は9月28日から30日までの3日間にわたって、つくば国際会議場を舞台とする30をこえるセッションに、世界25か国、90機関から1200名を超す来場者を迎えて開催されました。附属学校教育局としては29日につくば国際スポーツ科学アカデミー(TIAS)を中心に企画実施される「オリンピック・パラリンピックムーブメントへの参画」というセッションに参加することとなりました。具体的には「What can we do for the 2016/2020 Olympics and Paralympics」をテーマとする、すべてが英語で行われるシンポジウムへの登壇です。

登壇者は本学附属の高校生として坂戸高等学校の桑島祥さん、桐が丘特別支援学校の迫田 拳さん、視覚特別支援学校の山田翔登さんに加え、茗溪学園高等学校の太田虎之介さん、土浦第一高等学校の多和田萌花さんの五名です。加えて今回の企画のために海外の高校生としてBruna Lie Misutaniさん(Colegio ETAPA)とMario de Godoy Moreiraさん(Colegio PoLiedro)のお二人の高校生がブラジルから招かれておりました。

当日は永田恭介学長による趣旨説明、ロンドンオリンピック・パラリンピックでの教育担当代表者としてのNick Fuller氏による基調講演に続いて、高校生たちは約90名の参会者を前に、「何ができるか」「何をしたいか」、ということについてボランティア活動、共生社会、トランスボーダーなつながりの可能性などについてそれぞれ説得的に意見を述べました。それらの意見についてはFuller氏とセッション・オーガナイザーとしての真田久教授からコメントや質問があり、皆、的確に答えていました。これら一連のセッションは石隈利紀教育長による総括と登壇者に対する謝辞で結ばれました。

高校生たちの意見は翌日の「TSUKUBA宣言2015」に盛り込まれ、その宣言を以て今年度のつくばTGSWは幕を閉じました。



私の目標 ～5年後を目指して～

今年度はジュニア日本代表として数々の国際大会に出場させて頂きました。アジア選手権での五冠、世界選手権トラックでは2年連続銀メダル、団体銅メダル獲得。世界選手権ロードでは日本人史上最高位の4位。このような大会に出場し、結果を残すことができたのも、顧問の安達先生をはじめ、多くの先生方、仲間のサポートや応援があったからこそです。私の世界への挑戦はまだ続きます。必ず世界選手権で金メダルを獲得します。そして5年後の東京の地では1番高い表彰台と1番輝くメダルを首にさげることが目標です。今は根拠のない自信ですが、筑波大学に進学し、4年間の学生生活ではそれを裏付ける努力もします。今後とも応援よろしく願いいたします。

附属坂戸高等学校 3年 梶原悠未



主な大会成績

- 2015. 2 アジアジュニア選手権大会五冠達成
- 2015. 3 全国高等学校自転車競技選抜大会 2年連続3冠達成
- 2015. 6 全日本選手権大会ロード2年連続2冠達成
- 2015. 8 ジュニア世界選手権大会トラック 銀メダル・銅メダル
- 2015. 9 ジュニア世界選手権大会ロード4位 日本人史上最高位
- 2015.10 ジャパンカップ国際大会ロード 金メダル
- 2015.11 全日本オムニアム 金メダル 高校生史上初の獲得
- 2016. 1 アジア選手権大会 銀メダル・金メダル 高校生史上初の獲得

パラリンピックをめざして ~IPC Grand Prix Final 2015出場~

附属桐が丘特別支援学校 教諭 小山信博

7月26日、ロンドンのクイーンエリザベスオリンピックパークにて、IPC Athletics Grand Prix Final 2015が開催され、高等部1年の吉川琴美さんが陸上競技(400m)に出場し、7位の成績を収めました。

吉川琴美さんは、中学部3年のとき、学校行事で出場した東京都障害者スポーツ大会で優勝して以来、陸上に取り組み、半身まひを有するT37クラスで、100m、200m、400mの日本記録を半年で樹立しました。学業と両立しながら国内外の競技会に出場し、パラリンピックを目指す若きアスリートです。



出場しての感想と今後の抱負

附属桐が丘特別支援学校 高等部1年 吉川琴美

こんなに大きな大会は出たことがなかったので、うれしくてワクワクしている気持ちと、しっかり走ることができるかという不安もありました。しかし、スタジアムに入った瞬間、不安な気持ちはなくなりました。スタンドには2万8000人もの観客! 外国ならではの雰囲気! 私はそれにとっても興奮して、足の裏からゾクゾク!! と感じました。とても、すばらしい経験ができたと思っています。今年は、リオデジャネイロオリンピック、パラリンピックの年です。選考会まで残り少ない大会を悔いなく走り、パラリンピック出場を目指します。

埼玉県の未来を担うアスリートが集結

附属桐が丘特別支援学校 教諭 宮内綾香

平成27年11月30日(月)、附属桐が丘特別支援学校高等部の生徒が、埼玉県スポーツの未来を担うアスリート、彩の国パラリンピック選手育成事業の強化指定選手として「SAITAMA・ワールドスポーツ推進委員会の設立記念イベント」に参加しました。将来が期待される若手アスリートとして県内の中高生約120人が参加し、メイン企画では、埼玉県ゆかりのオリンピック、パラリンピアン、ラグビー選手とのトークセッションが行われました。また、ラグビーW杯2019、そして2020年東京オリンピック・パラリンピックの成功、スポーツを通じたレガシーの創出に向けた、未来アスリート宣言に参加しました。

イベントに参加して

附属桐が丘特別支援学校 高等部3年 八尾陽夏



SAITAMA・ワールドスポーツ推進委員会の設立イベントに参加し、オリンピックやパラリンピアン、ラグビー選手のトークを聞くことができ、貴重な時間となりました。私も、2020年東京パラリンピックの出場を目指し、努力を重ねたいという思いが一層強くなりました。高校卒業後は、大学に進学します。自己の競技に活かせるよう、新たなフィールドでスポーツに関する知識を深めていきます。4年後に向けて、やるべきことを着実に積み重ね、力をつけていきたいです。

パラリンピックを目指して仲間と共に

ゴールボールを始めて5年。私は附属視覚特別支援学校の在校生と卒業生からなる「チーム附属」に所属し、男女合わせて10数名の仲間と心温かい先生方と共に日々練習をしています。

私自身もそうですが、チーム附属には全日本の強化指定選手がおり、2015年11月に中国で行われた、2015 IBSA アジア・パシフィックゴールボール選手権大会に男女4名が代表チームの一員として出場しました。私達日本女子チームは、全員がそれぞれの役割を果たして、予選を勝ち抜き準決勝・決勝と勝利して、リオデジャネイロパラリンピックの出場権を獲得することができました。

次に、私達チーム附属は、同

じく11月に行われた日本選手権大会に、男子2チーム・女子1チームで出場しました。女子は、予選リーグで、優勝候補だったチームに続けて勝利、決勝戦では、ベテラン選手のいるチームと対戦し、ゴールボール歴2年の高校生が決めた得点を守りきりました。一方、実力者ぞろいの男子Aチームは、予選リーグでは苦戦しましたが、決勝トーナメントでは、貫禄のあるプレーで相手を圧倒して優勝し、念願の男女アベック優勝を果たしました。苦しい思いも悔しい思いもたくさんしてきたからこそ、またずっと目標にしてきたアベック優勝だったから、優勝が決まった瞬間は非常に嬉しかったです。そして、この大会はチーム附属の一体感を最も強く感じた大会でした。今後も日本選手権優勝や代表チームで活躍できる選手を目指し、みんなで協力し合いながらさらに強くなっていきたいと思っています。





「音楽はバリアフリー」 附属桐が丘特別支援学校 教諭 永杉理恵 ～東京藝術大学「障がいとアート」に高等部生徒が出演～

12月5日(土)・6日(日)、東京藝術大学において「藝大アーツ・スペシャル2015 障がいとアート」が開催され、附属桐が丘特別支援学校高等部生徒15名と附属視覚特別支援学校の生徒1名が出演しました。この「藝大アーツスペシャル」は2020年の東京オリンピック・パラリンピックを芸術面で盛り上げることを意図した取り組みでもあります。

藝大生と肩を並べ、高校生らしい素直で伸びやかな合唱と、片手で丁寧に奏でるピアノ演奏を披露し、その見事なコラボレーションに会場が大きな拍手に包まれました。この日のために、藝大の音楽科・指揮科・器楽科の学生や先生方が、また附属視覚特別支援学校の生徒と教員が、桐が丘の授業や放課後の練習に複数回参加し、共に刺激し合いな

がらよりよい音楽表現を追求する充実した時間を共有することができました。高校生も大学生も障がいがあってもなくても、同じ目的を共有し表現できる「音楽はバリアフリー」ということを実感し、体現する機会となりました。



附属久里浜特別支援学校 幼稚部

「餅つき親子交流会」を行いました

附属久里浜特別支援学校 幼稚部主事

工藤久美



ミニコンサート

12月11日(金)、附属久里浜特別支援学校幼稚部と附属視覚特別支援学校で「餅つき親子交流会」を行いました。当日の横須賀市は大雨と波浪の荒天でしたが、視覚特別支援学校のお友達は、久里浜のお友達に会えること楽しみに、電車に乗って久里浜まで来てくれました。お餅つきでは、杵を持って、保護者と一緒に餅つきをしました。手に付いたお餅がびよ～んと伸びる様子を見たり、「もっとちょうだい!」と手を伸ばして食べたりしました。お昼は給食と一緒に食べ、視覚のお友達から、「久里浜の給食、サイコー!」と言ってくれて、楽しくおいし

く給食を食べました。給食の後は、ミニコンサートを行いました。12月に幼稚部にやってきたピアノを含め、ホルンやサクソ、マリンバ、カスタネットやウッドブロック、ドラムなどの打楽器、歌、フラダンスで構成された全4曲を、久里浜と視覚の保護者と教員で演奏しました。子供たちは、楽器の形や音に興味をもち、お母さん達が鳴らす楽器をよく見たり、聴いたりしていました。また、視覚の子供が楽器を鳴らすと、久里浜の子供が近付いて一緒に見たり聴いたりするなど、久里浜と視覚の心温まる交流会となりました。

く給食を食べました。給食の後は、ミニコンサートを行いました。12月に幼稚部にやってきたピアノを含め、ホルンやサクソ、マリンバ、カスタネットやウッドブロック、ドラムなどの打楽器、歌、フラダンスで構成された全4曲を、久里浜と視覚の保護者と教員で演奏しました。子供たちは、楽器の形や音に興味をもち、お母さん達が鳴らす楽器をよく見たり、聴いたりしていました。また、視覚の子供が楽器を鳴らすと、久里浜の子供が近付いて一緒に見たり聴いたりするなど、久里浜と視覚の心温まる交流会となりました。

ミニコンサート



工房わかざりとの連携プロジェクト

附属聴覚特別支援学校高等部専攻科 造形芸術科主任 青柳泰生

工房わかざりは筑波大学附属大塚特別支援学校の親の会「桐新会」を母体として設立された知的障害者のための作業所です。工房では通所する方々への就労の機会を提供するとともに生産活動を通じてその知識や能力向上のための訓練を行っています。その中でもレーザークラフト製品をはじめとした各種の手工芸品はいずれも高い技術で製作され、各方面で好評を博しています。筑波大学附属聴覚特別支援学校専攻科造形芸術科、ビジネス情報科では、平成26年度に工房わかざりよりホームページ作成の依頼を受け、各科の授業の中で写真等の素材づくりやウェブページ作成を行いました。工房を訪問させていただき、製作現場や製品を拝見したり、販売会の様

子を見学したりするなどして生徒達は実務に即したホームページづくりを体験することが出来ました。この他にも本校の学校公式グッズ製作においてもご協力をいただき、生徒のデザインしたオリジナル製品が完成いたしました。今年度の文化祭では工房わかざりの製品と一緒に販売会を行い多くの方々にご購入していただくことができました。宣伝や接客販売、会計処理など準備から当日まで様々な係活動があり生徒にとってもたいへん貴重な経験となりました。



ウガンダ国の「中等理数科強化教員研修プロジェクトフェーズ3」に関わって



附属小学校 教諭
盛山隆雄

1月2日～9日まで、理科の佐々木昭弘先生と、アフリカ大陸の赤道直下の国、ウガンダ共和国に行った。私は4回目の渡航になる。

目的は、中等教育の理数の教員研修である。ウガンダ共和国のナショナルトレーナーと言われる理数の教科の専門家と数日間缶詰めになって共に勉強した。

今回の研修内容は、教科書の指導書を作る際の系統性や教材、主発問の吟味だった。彼らが書いた指導案や彼らが実際に行う模擬授業をもとにした議論は有意義だった。

ウガンダ共和国では、日本の中古車が多く走っている。ウガンダの人からすれば、日本の発展は、車をつくるような科学技術があるからだと考えている人は少なくない。

実際、研修をした事務所に隣接する中学校には、右のような看板があった。

「WE TRUST IN SCIENCE FOR NATIONAL DEVELOPMENT」

これを見て、日本も学校に掲げるべきでは？と佐々木先生と話した。



視覚障害学生の鍼臨床能力向上のための研究

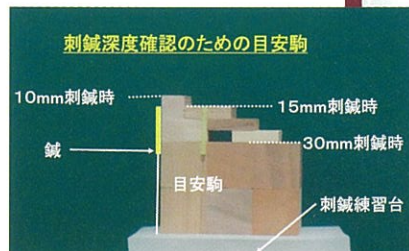
筑波大学 理療科教員養成施設長 宮本俊和

理療科教員養成施設では、科学研究費補助金基盤研究(A)の採択を受けて「特別支援教育における視覚障害学生の鍼臨床能力向上のためのITを活用した包括的研究」(代表者:宮本俊和)を行ってきました。平成24年度から始めて本年度は最後の年です。

鍼灸マッサージは、視覚障害者の職業としてわが国において数百年にわたる歴史を持っており、現在においても視覚障害者の自立を支える極めて重要な職業です。しかし、昨今、晴眼鍼灸師の増大により視覚障害鍼灸師の職業自立が侵されており、この問題を解決するためには、有能な鍼灸マッサージ師を育成することが必須です。

そのため本研究は、情報技術(IT)と視聴覚システムを導入して、個々の視覚障害学生のニーズに合わせた革新的な教育方法の開発を目的としました。

研究を開始した翌年が本施設の創立110周年に当たったため、明治以降の理療教育の歴史の変遷を調査しました。その成果は、「国立学校法人筑波大学理療科教員養成施設創立110周年誌」としてまとめ、全国の盲学校を始め関係機関に配布しました。また、本施設学生に授業評価を行ったところパワーポイントを使った授業がわかりづらいとの意見が多く出てきました。そのため、80インチの電子黒板と70インチのディスプレイを導入し、電気を消さない教室で電子黒板の画像を生徒のiPadに転送し、生徒が手元で画像を拡大するシステムを作りました。また、関節模型を導入し、弱視学生と全盲学生が協力して学ぶ授業形態を作りました。実習室の天井には、2台のカメラを設置して、教員が行う鍼治療の手技を拡大してプロジェクターに映すシステムを作りました。



研究期間中に障害科学専攻に入学した本施設卒業生2名が、視覚障害学生の鍼臨床技術向上をテーマに研究し、修士論文にまとめました(写真)。平成27年7月21日～24日に行われた自立教科担当教員講習会では、「視覚障害に配慮した理療科教育法の現状と課題」をテーマに、現職の盲学校理療科教員90名を対象に講義(写真)と実習を行うとともに、最終日にはパネルディスカッションを行いました。





朝永振一郎記念 第10回 「科学の芽」賞表彰式・発表会開催

附属学校教育局 教授 松本末男

12月19日(土)本学大会館ホールにおいて、朝永振一郎記念第10回「科学の芽」賞の表彰式・発表会を開催しました。

「科学の芽」賞は、筑波大学にゆかりのあるノーベル物理学賞受賞者の朝永振一郎博士の功績を称え、それを後続の若い世代に伝えていくとともに、小・中・高校生を対象に自然や科学への関心と芽を育てることを目的としたコンクールです。

今回、国内の学校184校及び海外5か国6校(中国、タイ、シンガポール、ハンガリー、アラブ首長国連邦)の日本人学校から小・中・高校生部門合わせて2,380件の応募がありました。その中から小学生部門9件、中学生部門8件、高校生部門2件の合計19件の作品(うち団体作品4件含む。)を極めて優秀と認め、「科学の芽」賞を授与しました。

表彰式・発表会には、受賞者29名が出席されました。そのほかにも受賞者のご家族や学校で指導いただいた先生方など多数の方々が出席されました。

本学からは、永田恭介学長をはじめ、三明康郎副学長、BENTON Caroline Fern副学長、中山伸一副学長、松村明副学長、石隈利紀副学長、伊藤雅英数理解物質系長、松本宏生命環境系町長及び「科学の芽」賞実行委員会委員などが出席し、総勢で100名を超える出席者となりました。

表彰式は、「科学の芽」賞実行副委員長である松本末男附属学校教育局教授の開会の挨拶で始まり、次に永田学長から各受賞者に表彰状と記念の楯の授与と祝辞がありました。続いて、部門毎に受賞者の発表会と審査に携わった附属学校教員及び大学教員による作品の講評が行われました。発表会では、スクリーンに作品の概要を投影しながら研究の成果を報告したり、司会者からの質問に身振り手振りを交えて受け答えをしていました。

また、今年度は「科学の芽」賞10周年と、朝永振一郎博士のノーベル賞受賞50周年を記念し設置された「学長特別賞」の授与がありました。同賞は、当日の発表会を聞いた永田学長によって決定され、大阪教育大学附属池田小学校長野佑香さんの「最後までおいしいふりかけのひみつ」が、その着眼点と発想を評価され、見事受賞となりました。

最後に「科学の芽」賞実行委員長の石隈副学長の総評があり、その後、同会館のレストランにおいて懇談を催しました。懇談では受賞者のご家族や、学校の担任の先生、副学長からも感想をいただき、終始和やかな表彰式・発表会となりました。

ご応募いただいた皆様、関係者各位に深く感謝を申し上げますとともに、来年度の「科学の芽」賞もどうぞよろしくお願いいたします。



●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia(後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア
paulownia

vol.35

発行日……平成28(2016)年3月15日

発行者……附属学校教育局教育長 石隈利紀

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン……スピーチ・パルーン

印刷……広研印刷 使用紙:U-ltimax[日本製紙]

